



懐素藻詠
五

へ遠門
1.4.9
止



法 13
1459
全止

怪談藻植草卷之五

熊の子と産屋語

丹波水上郡の山ざととら松柏藪藪と一して置も
あの藪ざととちかのぐらと山まこひみうとら
てんざととととく又黙つとおまうらた其山とま
もかむん人おま婦の若あうらほらおとと
さしておれもあくらららかが竹よらとらの
やまひみくはぬみ空しくまらとら其せ房ハ
年よととと十おたうてらかよ似合ととこのか



ち美くして却のむんねむれさうくをぢごんぢん
 ちと小貞首の者ありーがバニま子思えんと
 城うたははくみたぐ一人とらん居りそのを乃
 ちとありーうさむまごくとくわく山城をま
 らんと光澤ざん出さくともいふは常小かよん
 ーとあらねむがや我れく深く入さくーがま
 くる者ありいごー忽ち四方とまうていふぢごん
 ーくぬえ君うねと窓の上みたらしく志せし
 君の晴方とま川とよえり君はまはく一後つちり

候者候とかくー山まく樹木も是がた免ふ一面
 の志る地とまうてうぐくと各竹をとも祢とも
 別々にあんどまごらふねうむふよりあ
 ーくまう思ふかもの意はまけてさるるとん色
 った態一足者とはさひのーくと彼ねんたの例
 みたさう脊をせしてはさけるやみねとらさし
 が先年も大君のありたりーとれた態の容み
 ちとくはさけらるしー若ありとの居城うねて
 居ーまうたれが若もそれと賜らんとのさし



こり 赤糸ともつけやう縁をせんういふ其旨
も 態がふれはさし仇と名の然くううかやど
み けしやとれたる我ぬいそそのおれはあはれ
痛くういぐお束のころううふ竹やうんうき
おとまりたがやうなれば目とそくうんふうの
態れんおの上よおうさなるをまうんととるお
おどろたおもいふんととれども外面を若ふ
までおびそやううくま人もあつた歎の舎敷と
人もおろしく見えお彼がまうお身とまうせれも

まぬ山の雲うげあつた歎のたれんおそは義とや
ふりうう身も書状と成ぬるあつとふうか
ううとねがう教目とおろしやどお若も漸く消
しあう彼態こそあのめくおんたよに脊とらじ
ほさ付しやどにぬも家とねくう帰さんや
まこいや成とさうらうはははもやとつ思へど
も彼が脊おのりつれ態たまさか女とおひまうら
谷残くへらうした雲とつこひははるよ山のほ
まうく出女とおろし其まういづうをよりり女

らがつけがせうども被くまのうきにて令とつ
 ちまごめうくゝ家おぬまうまよりんん
 のん地ありーはごにりゝおうくゝ成歎やう
 まんと怒ゝゝ中月日のた何もりと子
 くはるふ十月おはて一男子を産り其ゝをら
 かゝられども面上うり怒がもくゝさ態のお
 とた毛つえんお生出たり母やあゝて残うり老形
 ぶ矣形ある者と産ゝあせの同とらひゝが
 浅るゝとちとちと打ねがまゝや山よ捨ん

あとや答おわうんとねもんどをらとが怒を
 のか那ゝさばら目よるげたおみうゝてど
 うつゝ小日残強ゝとまらる皇姑の医せと上
 氏お用のゝあひとげとまらるを産りせが
 ちあおつゝおよおんよのたがゝゝおあおと交
 いふゝゝ思ひ其あおたちより子細とてあて
 あまれるまとお思ひその思とあおぬませよ
 まる月せんとやととたれい女たとあうらあひ
 形か矣形ものとも捨たまらる育強さよと

ふいながもて居て彼鬼をとりて一にれをと上氏を
是城もつひいごたぐ皇親みうりそたぐや
まひいづげ鬼の天性カを人おすぐとてつよく
七八才のさろつよち五人して持入るをもろ
ぐと持さやとたり戸もまのあつりお豊と
ふおまのとお人おして熊の毛一面おひいど
眉一つおはさまり多ぞ人のめく七才のは
うちやく常人の十七才みえへおお字
文と素どくく一居るを今もさるや十二才お

もろも取んうははさるるおと上氏もさうて
丹忍へまうりしとぞ

狐僧と成子結

宝永正徳のまろろ京都海西のうわとりお田む
ら何某といへお士ありおよさるてあうくま
まお出おありしうささんおの人と彼僧とさ
孫なりといひ一やどに田村氏おれ我さくま
ふしん一たれども孝ようの僧のあまひさ
孫らしたあとおくもさく言語もさるやうお

して身みのとり身みも正ただしく只ただひと感あはり乃
出い家けなるもされどもつ人ひとふりまをりあとも無
あふひを恥は時ときるごととささむかといりつを二ふた月
とたきさう敵あて人ひととなひ念ねんざうりしあそ
あやしく世よとねもあおあー彼かの僧そうとむひ来きり
たればたさまよろまびよろこそそりぬりつと
てらよくもせなるはあぬ作つくて田た村むら氏し彼かの僧そう
おむろひ世よるの能よちうとそよー那なさ考こうのそ
僧そうと梳からりと中なかへどもあされ残のこりま

とく思おぼされどもありくま僧そう無なきととま
ぬせし時ときらつめても人ひととやもぐよ是これと念ねん
せだして一回ひとたまぬりく念ねんたまあへあさしと
あやしく思おぼふるまと中なかれを彼かの僧そう手て残のこりつて
たさふ幾いくひあさしとほみかくさげ定じやうまふ梳か
まると中なかれれば田た村むら氏したたよれどろさあそ
人のちもまあともりまごほりくも新あらた梳か
の僧そうとあてあつとまうりりまよと思おぼひ彼かの梳か
僧そうふとあつと中なかへはあつと竹たけ魚い友とももあそん

聖徳太子の御事



まじりてうき地界にてあはれおどろきの老とあは
や極僧とてえていさゝか友のちをさうあたま
兵人簡出離の人と目どといふ又とてかく目さ
ねる人残僧とて或は仇とてせの害を
といふ曰たぐあれ群さう縁のなきことする人
と遠ひ仇も處方あはれものあはれ格のさう
あはれぬくやいづれとも大伴のさう縁を
たやうのさうとせせむとせ聖僧の業さうとあ
一統おあもるた人を仕へ世の害残さうとあ

おあはれも人間とていさゝかおのれ
まじりて取らぬ一ねどとていさゝかおのれ
さうり人さうとせけえむいさゝかあはれと
甚悪哉報さうもさうまじりてあはれと
切はもれも白紙とていさゝか一
とて其後法團の白紙とていさゝか
交代の時刻いさゝかあはれと
さうた寺のさうんむねおせの傍のつとむ
がさうとていさゝか一とていさゝか縁あはれ

と徳圃よりのおりたるを伊豆社の名に
成苑もあつたありて又み人言と書さる
まことまこと中々色を田村氏まこととて
されまはせみたる祿福といふありとあり
りてあつたなりねがまくり福とさづけたる
かんやと中々色を祿福といふありとあり
るまはせむの世におりぬれどもさるん
るあつたなりと書さるる業と書さるる徳
成はる人なり行ふとても律やまらぬ

のあつたなりと書さるる業と書さるる徳
成はる人なり行ふとても律やまらぬ
いもんやそのえ乃其成聖僧が力あつて福を
ほさせんやとてまぐ同善しうりしとて
ほさるるまらるるなりと書さるる徳の化あ
れしうぬれたるありはれども是れまのあり
めづるも又あやしき

怪談藻塩巻之終

怪談... 草卷五

繪本楠公記二編

全十冊

近日出来

補正成子早稲城より淺川討死と
終ふありくありくあるの書あり

寛政十三年 酉 正月

大坂

心秋橋小久吉町

塩屋長兵衛

書肆

京都

内幸町三条上九町

梅村伊兵衛



繪巻楠公記二編

通り書

寛政十三年 閏 五月

塩屋長兵衛

梅村伊兵衛

